
桜田門を見上げて

マイクロフト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜田門を見上げて

【Nコード】

N6803N

【作者名】

マイクロフト

【あらすじ】

警視庁メンバーばかり出てくる短編集です。

男勝り（前書き）

だらだらと長い駄文ですが、
ご容赦願います。

男勝り

「ホントに九月かよ。」

高木は、直射日光の当たりまくる公園のベンチに腰かけていた。

強盗殺人事件の被疑者の男が住んでいるアパートの、目の前にある公園だ。

高木は、張り込みをしていたのだ。

隣には、長袖の地味なＴシャツを着た千葉が、高木と同じように腰かけている。

「そんな事言うのはやめろよ、高木。余計に暑くなる。俺なんか、長袖だぜ。」

千葉は、同じような色合いの、半袖のポロシャツを着た高木を見やっつて、言った。

高木は、この日何度目かのため息をついた。

もう、ベンチからアパートに鋭い目線を配り続けて、ゆうに半日が経っていた。

いい大人の男が二人して、小学生や子連れの婦人ばかりざわざわと居る、児童公園のベンチに半日も腰かけているというのはかなり不自然な気がしないでもない。

少なくとも、周りにいる子供たちには、不自然に映っているようだ。さっきからちらちらと、こちらに視線が向いている。

高木はまた、ため息をついた。

すると、千葉が高木の横っ腹を肘でつついた。

高木は犯人が現れたのかと、緊張した面持ちで千葉の方を見た。

しかし千葉の顔は、明らかににやけていた。

「え？ど、どうしたんだ？」

高木は間の抜けたような声で、言った。

千葉は、近くの木陰で幹に寄り掛かっている、ほっそりとした女性を指さした。

高木は、アパートからそちらに目を向けた。

しかし、彼女に変わったところは見受けられない。

怪訝に思っ、高木は千葉の方を見た。

すると千葉は、

「あの人、佐藤さんに似てねえか？」

と笑いの混じった声で言った。

高木は、一瞬ポカンとした顔で千葉を見るとすぐ、あきれたような顔になって、千葉の後頭部を勢いよく平手打ちした。張り込み中に何を考えているのだ。

そうは思いながらも、ちらと、木陰の彼女に目を向けた。

確かに、髪型や細い割にはしっかりとした体型に重なるところがある。

それでも、高木は似ていないように思えた。理由が浮かばないのは不思議であつたが、何かが全く違うような気がした。

理由を探そうと、無遠慮にじつと彼女の方を見ていたが、当の本人は気付く風も無くただ時間ばかり気にしている。

その時、また千葉が横つ腹をつついた。

「なに見とれてんだよ、人叩はたいといてさ。」

ヘラヘラと笑いながら、千葉は続けた。

「佐藤さんに言っ
てやる。」

「おい。」

高木は、アパートに向けていた視線の何倍か鋭いそれを、千葉に容赦なく向けた。

しかし、千葉は動じることもなくまだヘラヘラと笑っている。

高木は、本日二回目の平手打ちをかましてやろうと、千葉に距離を取った。

その時、アパートから被疑者の男が出てきた。

高木は刑事人生で初めて、張り込み中の被疑者に、あともう少し遅く出てきたらよかったのに。と思った。

[illegible]

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

高木らが、被疑者の男を弁解録取と取り調べにかけて、書類送検に回した時にはもう日をまたいでいた。

また、徹夜かよ。などとうめきながら、千葉は警視庁を後にした。

高木は、まだ仕上がっていない書類があつたので、一課の刑事部屋デカベヤのデスクに向かった。

パソコンの隣にリポビタンDの空き瓶を転がしたまま、高木はキーボードをたたいた。

すると、佐藤が入ってきた。高木を見止めると、腕時計を見ながら言った。

「高木君、いつまでやってるの。もう、2時回ってるわよ。いい加減帰きなさい。」

「いえ、まだ仕上がって無いので・・・」

高木はそう言いながら、佐藤の方を振り向いた。その瞬間、はたと固まった。

佐藤は怪訝に思い、高木の目の前で手を振って見せた。

「おい。起きてる？」

「起きてますよ……。」

「それなら早く帰って寝なさい。今日で徹夜何日目だと思ってるの。過労で倒れても知らないわよ？」

「大丈夫ですよ。さっきはちょっと思い出したことがあっただけです。気になさらないでください。」

佐藤は、逆に気になる。というように、眉をひそめた。

「なに？何か私に隠し事でもしてる？」

「そ、そんなこと無いですよ。」

「怪しいなあ。」

「……。何ですか、その目は。」

「ま、良いけど。じゃ、いい加減、キリのいいところで帰りなさいね。」

そう言って、佐藤は部屋を後にした。

閉まっていく自動ドアを見ながら高木は、思った。

佐藤さんらしいな。

木陰の女性は、腕時計を手首の内側に着けていた。佐藤は外側だった。

高木の顔はなぜか紅潮していた。佐藤の性格を見たような気がした。

高木はまた、キーボードに手をかけた。

秋の日はつるべ落とし

白鳥は、高木の運転で警視庁までの道のりを走っていた。

携帯電話のデジタル時計は6時47分を指していた。

秋はもうそこまで来ているのだろう。もう外は十分暗くなっていた。

「白鳥さん、今回の事件^{ヤマ}ですが、良く分から無いことがあるんですよ。」

いきなり何を言うのだ。白鳥は少し面倒そうに言った。

「なんだい？できれば手短にしてほしい、疲れているんだ。」

「・・・、どうして彼は実の娘を殺したのでしょうか。いえ、殺せたのでしょうか。」

「はあ？」

「いくらお金に困ったとはいえ、そう簡単に自分の娘を殺せるものなんでしょうか？」

「・・・。常人には無理だね。しかし、世間にはそういう人間もいるさ。今さらどうしたんだ、こんなことは刑事をやっている身には日常茶飯事だろう。なんだい？いきなり感傷的になるようなことでも起きたのか？」

「いえ、・・・すみません。忘れてください。」

高木は、身を縮込ませた。

白鳥はやれやれ。と、シートに寄りかかった。

「まあ、分からなくなるのも分からくないさ。・・・なんだか、ややこしいな。」

白鳥は苦笑した。

一息つくつと、そのまま続けた。

「刑事は、証拠だけを考えていればいい。動機だけを考えていればいい。それ以上考えていたら、頭がおかしくなってしまうさ。僕たちが扱うほとんどは、どこか頭のおかしい者ばかりなんだから。」

一抹の沈黙が車内に流れる。高木ようやく口を開いた。

「・・・僕は、刑事に向いてないんでしょうか。」

「向いていなかったら、刑事にはなれないさ。それとも、我が一課長の判断が間違っていたとでも？それか、制服警官に戻りたいかい？」

「いや、そこまでは。ただ・・・。やっぱり忘れて下さい。刑事として、あまりしてはいけない質問なのかもしれません。」

白鳥は自分が何も答えられないのが情けなくて、卑怯な気がした。

薄暗い中に、警視庁本部が見えてきた。

白鳥は言った。

「分からないさ。もうこの職業に就いて、何年も経つがね。ただ、今はあの警視庁^{ハコ}に帰ることだよ。仕事を仕上げなくてはならない。忙しく働いていれば、自分が何も分かっていないことを忘れられる。

「

今日は一段と疲れたな。と、白鳥は思った。

秋の日はつるべ落とし（後書き）

短い・・・。

定期入れ（前書き）

久しぶりの投稿です。

定期入れ

自販機から缶コーラが、ごとごとと音を立てて出てきた。

高木は缶コーヒーを買ったつもりだったから、半透明なカバーからうつすらと赤い流線形が見えた時は取りだすのを一瞬躊躇した。

疲れているのかなあ、とため息交じりに呻きながら、ベンチにドカッと座りこんだ。

疲れてないわけ無いのだ。今まで徹夜で張り込んでいたのだから。

自分が飲もうとしていたものよりも黒い液体を、無理やり喉に流し込んだ。

むせかえりそうになりながら飲み込んだ後、そういえば最近はコーラなんて飲んでなかったなあと思った。

「これからまた、仕事行くのか。」

頭をかきながら、高木は言った。立ち上がるのが億劫になり、空の缶コーラを潰してみたり、元に戻したりしていた。

空の缶コーラをごみ箱へ投げいれて、定期入れを胸ポケットから取り出す。

取りだしたそれを開いて、中を見た。

しばらく見た後、静かに定期入れを閉め、ズボンのポケットに入れた。

そして、勢いよく立ちあがった。

〓〓〓翌日

「ちよつと高木君。」

目暮は高木の肩を叩いて言った。

「はい、何でしょう？」

少し驚きながら、高木は目暮の方を振り返った。

目暮は、端が若干擦り切れている茶色の定期入れを高木の方に差し出した。

高木の定期入れだった。

「東口の自販機前にあるベンチに落ちていたよ。」

「ああ、すいません。・・・ありがとうございます。」

そう言つて、高木は賞状でも貰うかのような格好で、目暮から定期入れを受け取った。

ポケットに入れようと、ジャケットに手をかける。

その時、ぴたりと高木の動きが止まった。

そして、そのままの状態で高木は目暮に言った。

「・・・警部、どうしてこれが僕の定期入れだってわかったんですか？」

すると、目暮は高木から目をそらすようにして言った。

「そんなものを定期入れなんかに入れているのは、君だけだろう？」

「・・・」

高木は、立ちつくしていた。

しかし、目暮は平然とした様子で高木の方を見ると、言った。

「落としものなんかしているようじゃ、刑事は務まらないぞ。」

「・・・すいません。」

「後、そういうものは見えないように入れておくべきだよ。高木君？・・・ここだけの話だが、ワシにも同じようなことがあったんだ。」

そう言うと、目暮は立ち去った。

高木は、定期入れを開いた。

佐藤の顔がこちらを向いている。笑顔の写真だ。

高木には、写真を裏向きに入れなおすことがどうしても出来なかった。

衣替え

白鳥は後悔していた。

「・・・これならジャケットを着て来るんだったな。」

暑さ寒さも彼岸までとは良く言ったものだ。

現在の時刻午後7時、気温18度。日差しはほとんど無く、どんよりとした曇り空である。

白鳥は薄いブルーの長袖Ｔシャツにブラックジーンズという格好だった。

「寒い・・・」

ビルの陰から東京駅に張り込んで、まだ2時間も経っていない。だが、白鳥の手はケータイのボタンを押しづらいほどにかじかんでいた。

東京駅からは、厚手の上着を着ている人々やストールを巻いた人々が騒がしく改札を出入りしている。

こんなに人がいて被疑者が出てくるのを見つけれられるものなのだろうか？

どう考えても、可能性は低いだろう。

白鳥は早くも帰りたくなっていた。

ようやく、人の出入りが少なくなってきた。

ここまで減れば、被疑者を見つけることが出来よう。しかし、それは被疑者が現れること自体の可能性が低くなったということでもあるのだ。

白鳥は、被疑者はもう駅から遠く離れた所に行ってしまったのではないかと、帰ろうと思った。

その時、自分と同じような年格好の男の人が、家族連れで駅から出てきた。

白鳥は、何となくそちらの方に目を向けた。

4、5歳位の男の子の手を片方の手で引いて、もう片方の手で重そうなボストンバッグを持っている。

隣には、妻らしき女の人が手提げバッグを肩から掛けていた。

白鳥は、一層寒くなったような気がした。

そこへ、見覚えのあるスカイラインが向かってきた。

高木の車だった。

白鳥は、ビルの陰からスカイラインに歩み寄ると、後部座席に乗り込んだ。

「お疲れ様です、白鳥さん。」

高木は、どっしりとシートに寄り掛かった白鳥に言った。

「ああ。・・・で？被疑者どうなった？」

「八丁堀駅から出てきましたよ。先程、千葉が署まで連行しました。」

「そうか・・・。」

白鳥はふうとため息をついた。

高木はミラー越しに白鳥を見て、少し驚いたように言った。

「・・・白鳥さん？その格好寒くないですか？」

「まあ。」

白鳥はぶつきらぼうに返すと、ケータイを開いた。すると、ブブブと振動した。

気付かないうちに、メールが来ていたらしい。

メールを開いた。

小林からだった。

“ こんばんは。小林です。寒そうな格好をしていますね。仕事の関係で東京駅の近くに行っていて、たまたま白鳥さんを見つけました。ちゃんと暖かくして、風邪をしないようにしてください。それでは ”

「メールくらい見るべきだったな。」

「え？」

白鳥は、何となく暖かくなったような気がした。

殺人犯の命（前書き）

最近更新できてなくて申し訳ないです・・・。

殺人犯の命

佐藤は、資料の整理をしていた。

堆く積まれた膨大な枚数の資料を、カラーファイルに種類別で綴じ込むという作業だ。

仕事好きな佐藤ではあったが、こんな単純作業を1時間も2時間もしている、だいぶ疲れと飽きがくる。

綴じ込む手を休めて、ちょうど手に持っていた資料をちらと見た。

原元健はらもとけんという名の28歳の男が、9歳の桜井友香ちゃんさくらいゆうかを、惨殺した、という何とも気分の悪い事件だった。

もう、原元が逮捕されてから7年も経っているというのに、まだ裁判は終わっていない。

原元は、病的なロリータ・コンプレックスで、ピーターパン症候群の気もあり、遅れに遅れているのだ。

遺族はさぞやり切れないだろう。

佐藤は、思った。

殺人を犯した人間なんか、精神的な病に関係なく、死刑にしまえばいいのに・・・

警察の人間として、あるまじき思想ではあるが、どうしてもそう考えてしまう。

駄目だなあ・・・と自分を叱咤しつつ、佐藤はまた作業に取り掛かった。

そのまましばらく単純作業に努めていると、真後ろの席にいる目暮が大きな声を上げた。
電話が入ったのだ。

「何？本当か？・・・それは・・・ああ、そうか。分かった。連絡ありがとう。」

何事かと、佐藤は急いで後ろを振り返った。

「どうしたんですか？・・・警部？」

目暮はがちゃんと音がするほどに勢いよく受話器を置くと、目の前でこちらを振り返っている佐藤に言った。

「高木が、ナイフで刺されたらしい。今、病院に運ばれたそうだ。」

佐藤は、息をのんだ。

「・・・命は大丈夫なんですか？」

「ああ、命に別状はないそうだ。・・・かなり、重傷みたいだが。」

「・・・そうですか。」

「後で、病院に行くでしょう。・・・今は、作業を続けてくれ。」

「分かりました。」

佐藤は命は助かったということにホッとしつつ、急に作業の効率が下がった。

高木は、イテテ・・・と言いながら起き上がり、言った。

「いや、大丈夫です。た、大したことありません。」

高木は、体勢がきついのか少し顔を歪めている。

「・・・ゼーんぜん説得力無いわよ。」

「ハハハ・・・。イテテテ。」

笑うだけでも痛いらしい。

目暮は力の抜けたような笑いを浮かべると、言った。

「ま、まあ意識は、はつきりしとるようだな。・・・安心したよ。」

「ご心配をおかけしてすみません。」

「いや、良いんだ。で、刺したのは遺族の方だったようだな。」

「はい。」

高木が担当していたのは、もう犯人が確定している殺人事件だった。

遺族たちの前で、高木は殺人犯を取り押さえた。

遺族は、その殺人犯を狙ってナイフを構え、向かった。

その時、殺人犯の隣にいた高木は犯人を庇って・・・刺された。

「先に言っておくが、君には全く責任はないからな。気に病んだりするんじゃないぞ。君の一番しなくてはならない事は、早く回復して、早く仕事に復帰できるように努めることだ。・・・分かったな？」

「は、はあ。」

高木が答えると目暮は腕時計に視線を移した。

「・・・おお、もうこんな時間か、ワシはちょっとやることがあるからもう行くよ。佐藤は急ぎの用事もないだろう？」

「ええ、まあ。」

「なら、そんなに急がんでも良いだろう。ワシは、先に帰る。」

「分かりました。」

「来ていただいて、ありがとうございました。」

目暮は、去って行った。

「その体勢で大丈夫？きつくない？」

佐藤は、心配顔で言った。

「大丈夫です。一応は。」

そう言って、高木は座りなおした。

「でも、よく殺人犯のために身を投げだせるわね。全く、どんな利他的主義者よ。」

若干の皮肉を含めて佐藤は言った。

「利他的って……。僕はそんなじゃないですよ。」

「でも、刺されどころが悪かったら、高木君死んでたかもしれないのよ？危険過ぎ。」

「・・・でも、僕がそうしなかったら、遺族の方は殺人犯になってしまってますよ。確実に。刑事の僕だから、身のかわしかたも知っていたでしょうが。あんなに正面から、突っ込まれたらひとたまりもありません。」

「分かってるわよ。心配して言ってるの！」

何となく、頬を紅潮させて、佐藤は言った。

反して、高木は真面目な顔をして答えた。

「心配してもらるのは嬉しいですけど……。やっぱり、いくら殺人犯でも、都民は都民です。私たちが守らなくてはいけないと思うんです。たとえ、死刑にされる運命の者でも。刑は刑として、罰は罰として、罪を償わせなくてはいいけません。それが、刑事の務めだと僕は思います。」

「……。」

佐藤は黙りこんでしまった。

今度は、高木が心配顔でおずおずと言った。

「あの……僕、なんかおかしいと言いましたか？」

佐藤は、はっとした様な顔を見ると、答えた。

「ううん。おかしかったのは、私の方。ごめん。」

「いえいえ、なんで佐藤さんが謝るんですか。逆に見舞いに来てもらってしまって。」

「大丈夫、大丈夫。……じゃあ、長居も疲れるだろうしもう行くね。」

「ああ、そうですか。ありがとうございました。」

「うん。じゃ、早く復帰しなさいよ？皆、さみしいって言ってるし。」

「そ、それはないでしょう……。なんとか、頑張ります。」

佐藤は、小さく手を振ると戸を閉めた。

佐藤は思った。

皆はともかく・・・

力月後

「高木君の担当してた例の殺人犯。死刑執行が決まったそうね。」

佐藤は、うつむき加減に行った。

「そうみたいです。意外と早く決着がついたみたいです。」

「・・・でも、間違っただけだと思っただけ。」

「え？何がですか？」

「高木君がした事。」

「・・・それは、もちろんです。僕もそう思っています。」

「あら、珍しいわね。自信たっぷりの高木君なんて。」

「そんなにいつも自信無さげですか？僕。」

「それこそもちろんよ。」

「・・・ハハハ。」

高木は気が抜けたように笑った。

殺人犯の命（後書き）

今回、頑張ったつもりです。

天才少年

「君はいつたい何者なんだい？」

君は覚えているだろうか？

あのエレベーターに閉じ込められた時に僕がそう聞いたことを。

あの時、君は僕に何か重大なことを告げようとしていたね。

あの世で・・・

君は、僕をからかうつもりで言ったわけではないと、僕には思えるから、

あの世で・・・

本当に、君は告げようとしてくれていたんだと、僕には思えるから。

だから聞きたいんだ、
なぜ、僕だったんだと。

あの極限状態にたまたま僕が居合わせたから？

それとも、他に理由があるのかい？

もしそうなら、教えてほしい。

あの時、君は何を言おうとしていたんだろうか。

どんな重大なことを、
僕に話そうとしてくれていたんだろうか。

いつか、聞ける時が来ると、僕は思う。

君が、事件を鮮やかに解いているのを見る度に
僕はそう思う。

あの、何者も逃れられない

すべてを見通しているような眼まなこを見る度に
僕はそう思うんだよ。

コナン君。

工藤君。

天才少年（後書き）

うわぁー！ー！。

駄文にも、程がある（泣）

下戸の悲哀

高木は、心配そうに佐藤の方を見た。

佐藤は無心にキーを叩いている。
こちらには目もくれない。

高木は大きいため息をついた。

そして、佐藤から目を離し、資料に目を落とす・・・が、何も頭には入ってこない。

そのかわり、二日酔いの頭はズキズキと痛んだ。

昨日、高木は佐藤や千葉らと飲みに行った。

大型の連続殺人事件を処理し終わり、意気揚々と近くの居酒屋へささやかな宴会をしようとしてくり出したのだ。・・・そこで、彼は飲み過ぎてしまった。

佐藤の機嫌を損ねたのが昨日の酔っぱらった自分の行動にあるということは薄々感づいている。

普段、あまり飲まない、そして飲めない夕チである彼は、自分が飲みすぎたらどういうことになるか、全く把握していなかった。・・・しかも、目暮が帰った9時過ぎからの記憶が皆無である。

朝、本庁に出勤してからというものの、まだ一回も佐藤からは全く声をかけられていない。

高木からおはようございます。と挨拶してもまるで無視である。

全く、どんな醜態しゅうたいをさらしたというんだ。オレは。

“ウィン”と自動ドアの開く音がした。

振り返ると、千葉が出勤してきたところであつた。

「遅いわよ？千葉君。また遅刻。」

佐藤が体をよじつて、千葉の方を向いて言つた。

千葉は、うなじを掻きながら

「ははは。すいません。」

と、あまり申し訳なさそうもなく答えた。

高木は佐藤に話しかけてもらえる千葉を、若干の嫉妬と羨望のまなざしで睨み（・・・）ながら声をかけた。

「よお、今日も遅いな。」

高木の幼すぎる皮肉の言葉に少し笑いながら、千葉はうるせー。などと吐き捨てて

自身のデスクへと腰を下ろした。

高木が千葉の近くへと、キャスター付き椅子を座つたまま滑らせた。

「なあ、千葉。ちょっと聞きたいことがあるんだけど・・・。」

「うん？なんだよ？」

千葉は怪訝そうに言った。

高木は、佐藤の方を見ながら小声で言った。

「オレ、昨日酔っぱらって何か、佐藤さんに変なこと言ってた？」

「はあ？昨日？………ああ、そ　いやぁお前、珍しく酒飲
んでたよな。」

千葉は上の方を少し見上げながら言った。

「で、どうなんだ？心当たりとかあるか？」

高木の焦ったような言い方に軽く笑いながら千葉は言った。

「佐藤さんにか？そんなこと言われたって知らねえよ、俺も酔っぱ
らってたし。お前は佐藤さんとばっか話してるし。……マジ、
二人きりで話したいんならデートにでも行けよ。こちらら目暮警部
と二人じゃしらけるだろーが。」

ヘラヘラと笑っている千葉を睨みつけながら、高木はため息をつい
た。

そして、呻くように言った。

「知らねえか……。」

高木は自身のデスクへと戻った。

「うーん。」

高木はコキコキと首を鳴らした。

40枚もの捜査資料を処理し終わり、彼はコーヒーでも飲もうと席を立った。

自動ドアをくぐり、最寄りの自動販売機に歩み寄る。

……が、彼は途中で立ち止まった。

その自動販売機の前に佐藤がいたのだ。

なんとなく居心地が悪く、踵を返して外にある方の自動販売機へ行こうとした。

しかし、くるりと回れ右をしたところで、背中が声が出た。

「……あのさ。高木君。」

この分だと、オレが後ろにいたの知ってたな……。などと思いつながら、高木は振り返った。

「な、何でしょう？佐藤さん。」

「昨日……ごめん。」

「え？」

なにか文句を言われるものだと思っていた高木はポカンとした顔を

した。

「・・・やっぱり。覚えてない。」

佐藤はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

高木はちよつとしたパニックになっている。

「す、すみません。昨日は今までに無いくらい酔ってしまっで・・・で、昨日は何があっただんですか？」

佐藤は少しためらうようなそぶりを見せて、言った。

「昨日仕上がった連続殺人、被害者の名前覚えてる？」

「・・・あ。」

高木はハッと息をのんだ。

そうだ・・・だからオレはあんなに飲んだんだ。

「松田^{じん}仁さん。よ。しかも、爆弾で殺された。・・・でき過ぎよね。」

昨日、佐藤は疲れと酔いで、かなり饒舌^{じょうぜつ}になっていた。

しかもその日、松田^{じん}仁・・・松田陣平^{じんぺい}刑事そっくりの名前の人物が爆弾で殺されたのである。

諸々の事情が手伝って、つい松田陣平の事ばかり話してしまったのだ。

それに気分を悪くして、高木は深酒をしてしまったのである。

「ほんと、ごめん。後で酔いがさめて考えてみたら、そんなこと話されたら、黙りこくるしかないよなあと思って。なんか、話しかけづらくて。」

どうやら、オレは飲みすぎるとだんまりになるらしいな。

などと思いながら、高木はかぶりを振った。

「いえいえ、全然気にしてもらわなくていいですよ。．．．まあ、松田刑事を忘れるなど言っただのは僕なんですから。それに、そんなことでいちいち機嫌を悪くしている方も気が短いというか、なんというか．．．。」

彼は、早口でまくしたてるように言った。

佐藤は高木から目をそらした。そして、言った。

「うーん。私は、機嫌ぐらい悪くしてくれて嬉しかったけどね。」

「え？」

彼女は何も言わず、早歩きで去って行った。

それからしばらくの間、彼はぼうつとそこに突っ立って、彼女は何が言いたかったのか考えていた。

彼は、なんとなく顔を紅潮させて、目の前の自動販売機で缶コーヒ―を二つ買い、彼女の去って行った方へ、走って行った。

連続強盗・連続騒動 1

「佐藤さん！」

え？

佐藤は、声のする方に振り返った。

しかし、そこにいる声の主・・・高木は、こちらの方を向いてはいなかった。

高木は佐藤 弘子^{ヒロコ}巡査部長の方を向いていた。

「佐藤さん、ちょっとこの資料借りていいですか？」

「ああ、ええですよ。」

弘子巡査部長は、そばのデスクに置いてあった、水色の紙ファイルを差し出した。

佐藤は、半ば引っこ抜くようにキャスター付きチェアを引いて座った。

しかし、当の彼は佐藤の不機嫌さに気付いた風もなく、弘子巡部に何やら話しかけている。

佐藤 弘子巡部は1週間前に大阪府警から派遣されてきた、高木と
同じ年の女刑事である。

最近、大阪から名古屋、東京をまたにかける凶悪な強盗グループが
たびたび出没していて、その連続強盗事件の特別捜査班が警視庁で
設置されたのだ。

もちろん、大阪府警や愛知県警、またその周辺の県警などでも特別
捜査班を設置はしている。

しかし、あまりにも出没範囲が広すぎるため情報の交換がなかなか
難しい、また、特別捜査班に就ける刑事の人数・キャリアに偏りがある
などの諸々の理由により、人材の派遣が双方で行われているのだ。

いわば、刑事が警視庁・府警・県警の間でトレードされているのである。

とはいえ、大人数を動かすのは無理であるし、そのメリットも少ない
ということで、派遣されている刑事は、ごく少量だ。

そして、そのごく少量の刑事に選ばれたのが、この弘子巡部なのである。

警視庁第一課三係で連続強盗の特捜班に選ばれたのは、高木と目暮
と白鳥の三人だ。

たまたま、手が空いていたのがその三人だったのだ。

弘子巡部の代わりに大阪府警に派遣されたのは、白鳥だ。

「あの、佐藤さん。この資料、明日まで借りてもいいでしょうか？」

高木はおずおずと弘子巡部に聞いた。

「ああ、かまへんですよ。明日でも、明後日でも。ただ、ウチが大阪府警へ帰る前には返して下さいよ。もう、物盗りは勘弁して。最近そればかりなんやから。」

弘子巡部は軽く笑いながら言った。
ギャグのつもりらしい。

佐藤にはあまりおもしろいとは思えられなかったが、彼にはそれなりにおもしろかったようで、同じように軽く笑っていた。

「分かりました。ありがとうございます。」

彼は軽く会釈すると、自身のデスクの小さなラックにグッと差し込んだ。

もうラックはパンパンだ。最近の連続強盗事件の多忙さが分かる。

佐藤が受け持っているのは、琵琶土区ヒッの淀橋市ヨドバシで起こった、毒殺事件である。

使用された毒の解明を科学捜査研究所に依頼して、その結果を待っているところなのだ。

一時的なものだが、佐藤はかなり暇であった。
いつもは、こんなお昼時に暇なら、レストランには行けなくとも、高木や宮本婦警などとゆっくり昼食を摂るが、高木は多忙で、宮本

婦警はパトロール中である。

佐藤は浮かない顔で、あらかじめ買ってあったサンドウィッチをかじった。

“佐藤”

日本で一番多い名字。

名字を恨んだところで

仕方がない、仕方がない。

科捜研から、資料が届いた。

毒の正体はテトロドキシン、いわゆるフグ毒だった。

フグ毒はかなり入手しやすい毒である。

入手経路を特定するのは難しそうだ。

佐藤は、被害者・容疑者の周辺を洗うため、駐車場へ向かった。
捜査は足であるものである。

佐藤は赤いアンフィニに乗り込んだ。

シートベルトを止めていると助手席と運転席の間に、クリアファイルが落ちていることに気付いた。
何だろうと、佐藤はそれを引っ張り出した。

高木のファイルだった。この前同乗した時、落として行っただろうか。

後で届けようなどと思いながら、何となく中を見た。

例のごとく、連続強盗の資料が入っている。

10枚ほどある中で、真ん中に挟んである、3枚綴じの資料が軽く折り曲がっていた。

直そうと思い、取り出すと2枚目の端に小さく何か書いてあった。

“ 高木美和子 ”

佐藤はなぜか急いで、資料をファイルに戻すとアンフィニを発進させた。

半日後、高木はファイルを手渡された。

自分が、そんな落書きをしていたことをすっかり忘れていた彼は、何も気にした様子なく、佐藤から受け取る。

その後資料を見直し、自分の書いた落書きをみてかなり焦ることになった。

高木は、明日佐藤にあつたら、小さな声でも、名前で呼んでみようかなと思った。

“ 美和子さん ”

連続強盗・連続騒動 2（前書き）

連続シリーズ2

前作の2週間前の話です。

連続強盗・連続騒動 2

- - - 2週間前 - - -

白鳥は、驚いていた。

まさか、自分が大阪へ飛ばされるとは思っていなかったからだ。

例の連続強盗事件の特別捜査班が設置されるのに伴い、大阪府警への短期派遣者が出ると聞いた時

彼は、高木が行くことになるんだらうとばかり思っていた。

しかし、今さっき・・・数分前、目暮の口から聞かされたのは

「すまないが、今回の連続強盗での派遣者に君を抜擢した。大阪府警^うは、君のような若い警部の手が空いていなくてね。3日後というまた急な話なんだが・・・、この一週間くらいで犯行の間隔が狭くなってるのは君も知ってるだろう？お互いに切羽詰まってるんでな少なくとも2カ月は帰れないだらうが、よろしく頼む。」

という言葉であった。

目暮などの第三者から見れば、特に意外な展開でも無いらしく、淡々とした口調だった。

周りの先輩方も同じような態度だ。

とはいえ、高木はかなり恐縮していた。
白鳥は、どちらかといえば高木よりも先輩の方が恐縮するべきなのでは？と思うのだが。

いや・・・。

先輩への不満より、自意識過剰なエリートのプライドの傷よりなにより、白鳥の心を揺るがせたのは
小林澄子先生・・・三十路もたけなわにやっとこさできた彼女の存在であった

もう1月も下旬にさしかかっている。

帰れるのは早くても3月の終わり。悪くすれば4月になる。

ということは、出会ってから初のバレンタインとホワイトデーが丸つぶれじゃないか！

全く・・・ツイてない。

白鳥は心の中でそう吐き捨てた。

これは、報いなのだろうか？散々高木かれらと佐藤の邪魔をしたからなのか？

だとしたら、自分の早とちりのせいだ。

諦めの悪さのせいだ。

佐藤さとうの心はどうあがいても、もうこちらには向かない事くらい分かっていたのに。

・・・なんと、格好の悪い。最低だ。

いつもはここまで非科学的な事をもややと悩んだりもしない彼であつたが

今回ばかりはそんな偏屈ばかり言っていられる心境では無かつた。

仕事が一段落した白鳥は、小林に電話をかけてみることにした。
現在の時刻・・・午後9時半。

小学校の先生だ、もうとくに仕事は終わっているはずだ。

出られないのかと思うほど長いコールの後、小林の謝る声が彼の耳に流れ込んできた。

“すみません！ちょっと今、手が離せないんです。・・・あ、後でかけなおします。ホントごめんなさい！”

手が離せない？何をしてるんだろう？

今、彼女は何をしているんだろう。

仕方がない、仕方がない。

電話を待とう。

うわああっ

鍋から、液体になったチョコレートのしずくがとび跳ねた。

全く、何やってるんだろう。

たかが、チョコを成形しているだけなのに。

なんで、こんなに台所がチョコまみれになるわけ？

小林はうーん。とうなつた。

そんな時だった。白鳥から電話が入ったのは。

ダメ、ダメ、今はダメ。

どう隠し通そうとしたって、相手は刑事だ。

こっちが何をしているかなんて、電話越しでもすぐにばれてしまうだろう。

今からバレンタインデーの用意をしているなんて、かなり恥ずかしい。

ま、あと三週間すれば分かるんだから。

小林は、電話を置いた。

三週間後に見られるであろっ、笑顔を思い浮かべた。

オモイ（前書き）

今回は長めです。

一週間遅れのバレンタインデー story。

オモイ

「確保おお！」

目暮のダミ声とともに、2名の刑事がある一人の男に向かって駆けだした。

いち早く男につかみかかった高木は、走り込んだ勢いのまま突き倒し、手錠をかけた。

「12時56分。被疑者確保。」

高木は腕時計を見ながら、そう呟いた。

「ホラ、立てよ。」

もう一人の刑事・・・千葉は被疑者を起こすとふう。とため息をついた。

そこへパトカーがやってきた。

「お疲れ様です。」

制服警官が窓から顔を出して、千葉と高木に言った。

そして、後部座席を指さした。そして、その動作につられるようにして

高木は後部座席に被疑者を乗り込ませた。

「じゃあ、後はよろしく。」

「佐藤さんにも、よろしくお願いします。と伝えておいてくれよ。」

高木と千葉は口々に言った。

「了解です。では。」

制服警官はそう言うと、パトカーを発進させた。

高木と千葉は、あっという間に見えなくなっていくパンダをぼうつと眺めながら

張り込んでいたここ3日だけで十数回は足を踏み入れているコンビニへと歩き出した。

「で、良かったのかよ。警視庁へ帰らなくても。」

千葉は高木にそう尋ねた。

「はあ？なんで俺が警視庁へ帰るんだよ。俺も昼食まだなの、知ってるだろ？」

「いやー。だって、佐藤さん警視庁じゃん。」

「・・・そりやそうだろ。今張り込んでた犯人、佐藤さんの担当なんだから。弁解録取に時間かかりそうなヤツだったから、だいぶずっと出てこれないだろうな。」

高木は、千葉から目をそらして言った。千葉の言わんとすることが彼にも分かったのである。

「頑固っぽいヤツだったからな。なにせ3日も音沙汰ナシで、あんな掘っ建て小屋みたいなトコに刑事に四六時中見張られながらカン

ツメだぜ。普通の人間なら気が滅入っちゃうよ。……って、俺が言いたいのはそっちじゃねえよ。弁解録取に時間がかかるって分かるんならなおさら、早く帰ろうとしないのかって言うてんだよ。」

「だーからー。なんで俺が佐藤さんに会いに、帰らなくちゃならないんだよ。」

高木はしつこく誤魔化し続けることに決めた。

「……今日はバレンタインデーだろうが。俺みたいなヒトリモノには全くカンケーのない日だが、お前みたいなの……」

「あーっ。もういいよ。うるさいっ！ 知らん知らん。今日がバレンタインデーだなんて、俺は知らないんだよ。」

高木が半ばヤケクソで喚いたところで、二人は、もはや常連となったコンビ二へと足を踏み入れた。

想像していた事ではあるが、入って正面にはピンクを基調としたチョコレートなど

バレンタインデーグッズがずらりと陳列されている。

これも見るのは何回目だろうか。

千葉はそう思いつつ、意地悪い口調で言った。

「あのさあ。なんでこのピンク軍団を何度となく見てんのに、今日がバレンタインだって気付かなかったワケ？」

「いや……脳が半分寝てた……んだと思う。」

「何だ？それ？」

「それしか考えられない。」

高木は棒読みで言った。

全く、嘘についているようにしか見えない。

「ばーか。」

千葉はそう言うと、サンドイッチなどが並んでいる棚に歩み寄る。
そして3パックものサンドイッチをつかむと、買物カゴへと放り込んだ。

高木は、そんな千葉の様子を横目におにぎりを2個つかむと同じく、カゴへと放った。
そして口を開いた。

「なんかさ・・・佐藤さんが知らない男と喫茶店にいたんだよ。ち
ょうど一週間前。」

「・・・・・・は？」

千葉は、高木の方を勢いよく振り向いて言った。

「どういうことだ？」

「どうもこうも無いよ。今言った通りだよ。」

高木は、力無く笑いながら言った。

「ま、愛想尽かされたんだよ。」

「おいおい。・・・お前、それでいいのかよ。佐藤さんに問いただしたらどうなんだ？もしかしたら、お前の勘違いかも知れないだろ？」

「なんか、聞くのが怖くてさ。」

「それで、お前は警視庁（むしやう）に行きづらいのか。佐藤さんからチョコもらえるかどうか、怪しいから。」

「よくあるだろ？バレンタインデーとかクリスマスみたいな日に、別れ話を切り出すとか。」

「それが怖くて、逃げてるって言うのか？・・・情けない奴だな。」

高木は千葉の発言を丸無視し、飲み物を緑茶にするかウーロン茶にするかに神経を集中させた。

しかし、集中しようと思えば思うほど、うまくはいかない。

高木は手前にあった緑茶を、乱暴に驚づかみした。

その時、彼の耳にコンビニで先程から流れていたBGMが耳に入っ
た。

最近、巷（ちまた）で流行っている曲であつた。

「なあ。この曲って、なんていうんだっけ？」

「え？・・・ああ、これAKBのヤツだろ。・・・えーと。なんだ

「つたつけ？」

そんな事を言いあっているうちに、そのBGMはサビに入る。

「ああ！ヘビーローテーションだ、これ。思い出した。」

「思いだしたんじゃない、今、曲に名前がでてきたんだろ。」

「……。」

高木にツっこまれて、千葉は、フン。と鼻を鳴らした。

「うるさいな、わかったんだからいいだろ？」

そう言いながら、千葉はサンドイッチ3パックと菓子パン2個、缶ココア

その他菓子類がゴロゴロ入ったカゴを手にレジへと向かった。

高木は、どんだけ食うんだよ。と思いながら、人のいなくなったサンドイッチ売り場から

1パックだけ、サンドイッチをつかんだ。

千葉が会計し終わったところを見て、レジへ向かう。

そこで、千葉が口を開いた。

「そう言えばさ。なんで、ヘビーローテーションって言うんだろっ
な。」

「あ？……そんなん分かったの。」

「いや、だって、直訳すると重い・・・ローテーションで日本語で何だろ？」

「知らん。・・・重い言葉を延々言ってるからじゃないのか？」

「重たい言葉？何のことだ？」

高木は何となく言いづらそうに言った。

「I want you・I need you・I love you・だろ？全部重い。」

千葉は、一瞬ポカンとした顔を浮かべたが、すぐに、ぷつ。と吹き出した。

「何だよ。それ。」

千葉がケラケラと笑いだしたところで、高木は会計を終えた。足早にコンビニを後にする。

「おいちよつと待てよ！」

置いて行かれそうになった千葉が、急ぎ足で高木を追う。

コンビニを出て、警視庁の方向へ歩いて行く。心なしか、高木の歩幅は小さい。

「重い、ねえ・・・。」

「もういいよ。失言だったよ。忘れてくれ。」

「・・・ったく。そんなこと言ってるから、佐藤さんに浮気されたとか言うことになるんだろう?」

「別に、もしかしたら、俺の勘違いかも知れないし。」

「そうじゃねえよ。俺だって、佐藤さんが浮気しているなんて思っ
てないさ。ただ、お前、佐藤さんにそういう言葉言つた事あるか?
重い重いつて言つてばっかで、何も言つてあげられないんじゃない
だぜ。」

「・・・お前には、分からないよ。言葉の重さが。」

「馬鹿。言葉なんか言えればいいだけだ。重たいなんていうのは、
胸が無いんだよ。あのな、言葉が重いつてのは・・・そう
だな、気持ちというか・・・“想い”が重たいんだ。」

「ダジャレかよ。だから、お前には・・・」

「いいから聞けつ・・・だからな、そう簡単に“想い”は変わっ
てくれない。一度好きになつたんなら、そう簡単に変わつたりしな
いものなんだよ。お前が言うように言葉が重いんじゃない。お前自
身の“想い”が重たいんだ。」

「・・・。」

「それでも、言わなくちゃダメだ。言いづらいのは、思い入れが強
いからだから、後悔することになる。重たけりゃ重たいと感じるほ

ど、言わなけりやならない。」

高木は千葉を睨むように見ると、こう言った。

「・・・気障野郎。」

彼らは足取りを速めた。

少しでも早く警視庁についてしまいたかった。

言わなけりや、ダメだろうか。言わなけりや、分らないだろうか。佐藤さんは、俺の方を、向いているんだらうか。

*****一週間前*喫茶店*****
**

「ごめんなさいね。急に呼び出したりして。近くに来てるって聞いたもんだから。」

佐藤は、喫茶店の一番窓側にあるテーブル席へと腰を下ろした。向かいには、推定30歳前後の男・・・佐藤の従兄がミルクティー

をすすりながら座っている。

「いや、良いんだよ。どーせ、暇だし。で？何だ？俺に聞きたいことって。」

「バレンタインデーのチョコって、どう渡されれば、本命だって分かる？」

「は？何の話だよ。俺に本命チョコくれるってのか？」

「何考えてんのよ。・・・違うって。」

「ああ？・・・ほう。アンタにもようやく彼氏なるものが出来たか。」

従兄は軽く笑った。

「にもは余計。もう私も28ですつ。兄さんとは違うわよ。」

「うるさいね。・・・本命ね。別に、口で言えればいいじゃねえか。」

「口で言いづらいから、わざわざ兄さんに聞いてるんでしょ。」

「おいおい。何だよ。それ。そのくらい、サラっと言えよ。・・・ってか、何にも言わなくなつて、彼氏なら、本命だつてわかるんじゃねえか？」

「分かるものなら良いんだけど。いまいち、どう思われているか、分からないのよね。」

「やっぱ、聞けよ。本人に直接。」

「だーからー。それが出来ないから、呼び出して聞いてるんでしよう?」

「・・・あーもー。急に呼び出すんじゃないよ。俺も、暇だ、暇だっつていても・・・」

従兄が呆れた様子で切り返したが、その途中、佐藤が、はっ。と何かに気付いたような顔をした。

「・・・ありがとう。良いこと思いついた!じゃあ、また今度ね。」

「お、お、おいおい!」

佐藤が思いついたことは、ぎりぎりまでチョコをあげずに、じらして様子を見ることだった。

自分をどう思っているか、計ろうというのだが、この思いつきのせいで、高木が一日どきまぎさせられたのは、言うまでも無い。

オモイ（後書き）

千葉刑事の長々発言は・・・。
どうにかしてください（笑）
目をつむってください・・・。

恐怖の矛先（前書き）

少々グロい・・・・・・というか怖いです。

そういうものが苦手な方などは、自身の責任で大丈夫だという方のみ、ご覧ください。

恐怖の矛先

それは思わず、声が出てしまいそうなほど、酷いものだった。

乳児の虐殺死体。

この赤ん坊を殺したのが、実の母親だというから、信じられない。

白鳥は、死体から目をそらした。

性別はおろか、どちらが頭で、どちらが足さえも良く見ないと分からない。

あまりにも、無残だ。

母親は、先程から赤ん坊の横で放心状態で膝をついている。どれだけ引つ張っても、動こうとはしない。

「こら。早く動きなさい……。いつまで意地張ってるつもりなんだ。」

ギョツと自分の腕を胸に抱えていて、手錠をかけることすらままならない。

これでは、連れて行ったところで、いつ逃げ出す事やら。

白鳥は小さくため息をついた。

通報があつたのは、今から30分程前だった。

この事件現場であるアパートの大家さんが、自身の携帯電話で通報したのだ。

回覧板を回そうとしたところ、戸が開け放しており、赤ん坊……ではなく、赤ん坊の母親が泣きわめいているので宥めようと、悪いとは思いつながらも、無断で入ったのだという。

自身のアパートなんだし、無断で入った事に全くもって罪は無い。第一発見者である大家さんも、今回の事件の被害者と呼べるだろう。

無理やり腕を出させ、手錠をかける。

真っ赤な血にまみれた手 というより肘から下にかけてが

真っ赤だ。・・・を見て、彼は背筋が寒くなった。

どうしたんだ。血なら、もう見飽きるほど見てきたじやないか。今更ぞつとしていてどうする。

過去の、まだまだ新米だった頃の記憶が、彼の頭にフラッシュバックした。

「こら、これから刑事になろうっていう期待のホープがこんなんです。ちゃんと死体を見れなくちゃダメじゃないか。」

「は、はあ。」

白鳥は、弱弱しく返事をした。

彼の前には、赤ん坊の虐殺死体。

父親が犯人だということが、彼には信じられなかった。メモを取るのも躊躇ためらされてしまう。

松本が目の前で、チャキチャキに働いているのを、不思議なもののように見ながら、彼はのろのろと動きだした。

「えー。被害者は・・・ウスタグミノル白田稔君、3カ月。・・・い、いや1歳3か月。被疑者は、ウスタグユウジ白田祐治、ハタチ。・・・と。」

メモを取りながら、頭に浮かんだことが、口からダダ漏れである。松本は大きいため息をついて、白鳥の頭を軽く小突いた。

白鳥はいやいやながらも、改めて赤ん坊の方を見た。

全く原型をとどめていない。オノマトペで言えば、ぐちゃぐちゃ以外に他ならない。

猛烈な吐き気が彼を襲う。しかし。見なければならぬ・・・のだらう。

もう限界とばかりに、彼は外に駆けだした。

あの時、まだ彼は、脆弱だったのだ。

マトモな人間としての脆さ。誰もが持つ、持たれるべき脆さ。

白鳥は、やっと宥めすかして母親を連れ出すことに成功した。半ば無理やりパトカーに乗せ、後は任せたと、千葉に引き継ぐ。犯行現場に戻ると、彼はまた死体の方を改めて見た。

あの時のように、こらえ難いような猛烈な吐き気に襲われることはないが、その代わり、良くいろいろな所がちゃんと見えるようになった。

右足があり得ない方向に曲がり、左足に至っては取れている。腕は、もうあまりにぐちゃぐちゃでそこにあつたのかさえ確認できない。お腹から、そこに出てきてはならないはずの物がずるりと引きずり出されている。顔は潰されている・・・というよりえぐられているの方が、合っているだろう。もちろん全身は真っ赤だ。

死体の状態を淡々とメモにとるだけ。ただ、それだけ。

見えることは刑事にとっては大切なことだが、人間としては、この自分の冷静さが恐ろしかった。

彼はまた背筋が冷える感覚に襲われた。
しかしそれは、死体の気味悪さや悲壮感からではなく、自分に対し
てのこらえ難い感情からだった。

赤ん坊の泣き声が、聞こえる。

D o y o u m i s s m e ?

高木は、3月11日午後2時46分、秋田駅にいた。

駅のソファにぐったりと寄りかかる。彼は疲れていた。

新幹線も、在来線も全滅。彼は東京に帰る術を無くしていた。携帯電話はつながらない。連絡さえ取れない状態。しかし、高木を最も疲れさせているのは、数十分前までいた隣県が悲惨な状況になっているということだった。

あと、もう少し。あともう少し、岩手が出るのが遅かったら・・・

高木は、それ以上考えないことにした。とにかく助かったのだと、それだけを頭に言い聞かせる。だが、彼の頭には岩手で会った人たちの記憶がまざまざとよみがえってくる。

突然息が出来なくなるような、そんな衝動に駆られた。背筋が凍るように寒く、鳥肌は立ちつばなしだ。

良かった、ラッキーだった、なんてものじゃない激情が彼を襲う。恐ろしい恐ろしい。

うつらうつらとしているだけで、彼の意識は覚醒していた。もう疲れた。

余震が秋田を襲う。

*****3月11日午前11時58分*****

佐藤は警視庁で、宮本と他愛もない談笑を楽しんでいた。

「もう、美和子ったら、そんな浮かない顔して！」

「浮かない顔？」

「そうよ！何？出張で高木君がいないのがそんなに寂しいワケ？」

「馬鹿言わないで。明日には帰ってくるのに。」

「そーよ！だから、早く明日にならないかしらってずーっと、遥か彼方の東北に想いを馳せてたんでしょうが。」

「仕事が忙しくて、そこまで気が回らないわよ。」

「冷たいねー。」

そりやどうもと軽くあしらい、佐藤は仕事部屋へと戻る。デスクの上を見ると、途中で保存状態にしてある資料制作中の画面のパソコンが、真っ暗になっている。資料の制作を再開するが、なかなか進んでいない。集中できていないことを、認めざるおえないと彼女は苦笑した。

浮かれた気分を何とか静めて、仕事を開始する。画面がぱつと明るくなった。

二時間半ほど作業し、何とかひと段落つかせた佐藤は、ちよつと遅めの昼食でもとコンビニへ走る。

「えつと……サンドイツと、何にしようかしら……。」

いろいろと買うと、彼女は仕事部屋に戻り、右手で作った資料の見直しをしながら、左手でサンドイツをばくつく。警視庁の最近はかなり忙しかった。東北から関東にかけての岩手、秋田、山形、福島、栃木、埼玉、そして東京で、同一犯とみられる連続殺人が起きたのだ。そのため、高木は岩手と秋田へ出張捜査へと駆り出されている。東京へと帰ってくる予定日は、明日11月12日の夜だ。そのため、彼女はいつもよりも集中力が散漫としていたのだ。

そんな時、異変が起こった……

*****3月29日*****

置時計を見て、地震はこのくらいの時間だったなあと思つた。ふと、斜向かいのデスクに座っている高木の方を見る。仕事をしている分には分からないが、彼は地震後から覇気や元気というものが無い。性格が急に暗くなったような感じだ。一週間前、やっと仕事場に復帰し地震後初めて彼女に会った時も、あまり嬉しそうにはしていなかった。いや、喜んではいたのだが彼女のそれと比べると、リアクションというものが大分薄かった。いつも、どこか上の空で何か考え事でもしているようだ。彼女は心配している。そして、それ以上に彼女は……

ウィン。という自動ドアが開く音が聞こえる。佐藤は、仕事を終え

警視庁を出た。高木はまだ仕事中。体を壊すのではないかと彼女は思う。

そして、自分ほど、数ヶ月ぶりの再会を嬉しく思っていなかったであろうあの日の高木を、想う。

彼は、私を失くしても、私が想うほどには、悲しんではくれないのだろうか？いつの間にか、自分を買って被っていたのだろうか？

佐藤は、少しうつむき加減になって、駐車場へと向かった。

高木は、駐車場に向かっていた。これから、警視庁から車で10分もかからない所にあるアパートへと張り込みに行くのだ。車で行くには近いけど、歩くには遠い。そんな距離。高木は車で行くことを選んだ。ずいぶん奥に止めちゃったもんだなと思いながら、彼は駐車場を横切る。そんな彼の視線の先に佐藤が現れた。声をかけようと小走りになった。しかし、すぐに彼の足が止まった。

様子がおかしい。

そっと近づき、気付かれないように顔を見る。彼女の顔は険しかった。彼には泣きそうになるのをこらえているのだとすぐに分かった。

「さ、佐藤さん？」

佐藤はびくつと体を震わせると、高木の方を振り返った。

「何？」

彼女のぶっきらぼうな声とは対称的に、彼は優しい声で言った。

「どうしたんですか？」

「何が？・・・どうもしないわよ。」

「そうですか？」

高木はポンと佐藤の頭に自分の掌をかぶせた。

「そんな、険しい顔して。なんでもないわけないでしょう。」

「・・・高木君に何がわかるの？何にもわかってない癖に。」

「わかりますよ。」

佐藤はむっとして高木を見上げた。

「じゃあ、何があるのか言ってみなさいよ。」

高木は佐藤と目線を合わせるようにすこし腰を曲げる。掌を頭に乗せたまま、言った。

「僕のせい。なんででしょう？」

「当たり前じゃない！」

佐藤は高木の手を振り払う。彼は振り落とされた手で、彼女の肩をつかんだ。

「俺に文句あるなら、遠慮なく言ってくださいよ。」

「文句なら、いつも言ってるじゃない。」

「そうですね。いつもなら、言ってくれます。なんで、今回は何も言ってくれないんですか？」

佐藤は高木から目をそらした。

「高木君が悪いわけじゃないから。」

「でも、俺のせいなんでしょう?」

「・・・もう。なんでもいいでしょ。ホラ。高木君も仕事行かなきゃダメでしょう?」

佐藤は歩きだそうとしたが、肩をつかまれていて動けない。

「大丈夫です。あと30分のうちに行けばいいんです。」

「でも、やっぱり・・・」

「ダメです。言うまで、離しません。」

佐藤は何かを考えるようにうつむいた。そして、もう腰を伸ばしている高木の方を見上げ、言った。

「言う、とか。そういう問題じゃないの！やっぱり何もわかってない！」

佐藤の剣幕に押されつつ、高木はまた優しく言った。

「すみません。知ったかぶりしたみたいですね。俺。」

高木は、口調を少し強張らせて続けた。

「俺、どうしたらいいんですか？」

「手を、離して。」

佐藤は出来る限り突き放した言い方をした。彼女は自分が意地を張っている事はわかっていた。

それでも、彼女は皮肉を言う事を止められなかった。

「・・・ちよつと前まではずっと仕事中也上の空だったのに。」

「俺の仕事ぶりに文句があるんスか？」

高木は佐藤の肩から手を離した。

「仕方ないじゃないですか。あんなことがあつた直後ですよ？俺みたいな弱っちい人間にはこたえるんですよ。」

佐藤は震災のことを言っているのであろうと気づいた。あの日の高木の態度について、心の半分ではそういうことだったのか、と納得する。しかしもう片方では、本当にそれだけ？と疑っていた。

「弱くないよ。」

「そんなことないですよ。・・・今も、佐藤さんが俺のことどう思ってるかって。そればっか気にして。こんな尋問みたいなこと、してるんですから。」

「嫌ってると思うの?」

「わからないんです。だから、遠回しにしか聞けないで怖がってるんですよ、いつも。」

佐藤は言葉を詰まらせた。

「俺は。好きですよ。佐藤さんのこと。震災でいっぱいいい人が亡くなってるのを見て、あれが佐藤さんだったらって、勝手に考えて。勝手に怖がって。不謹慎極まりないですよ。でも、考えずにはいられないんです。貴方を失ったら、俺は生きていける自信が無いから。」

高木は、また佐藤の肩をつかんだ。

「佐藤さんは、どうなんですか?」

佐藤は高木の方を見た。彼女は涙ぐんでいた。

「まだ、分からない?」

「・・・。」

高木は、何も言わず佐藤の頭に片方の手を置いた。彼は彼女を見つ

めたまま、目を離さないでいた。

それでも、彼は視線を振り切り、彼女を力強く抱き寄せた。

D o y o u m i s s m e ? (後書き)

これで、「桜田門を見上げて」の連載を終了させていただきました。
今まで読んでくださった方々、ありがとうございました。

一刻も早い、震災からの復興を願います。

3 / 2 9 マイクロフト

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803n/>

桜田門を見上げて

2011年6月1日19時08分発行